

---

# ブルー・アイリス

青龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブルー・アイリス

### 【Zコード】

N8750Y

### 【作者名】

青龍

### 【あらすじ】

俺こと達哉は、科学と魔法が発達した壁に覆われた世界でぬるま湯のような平和に浸っていた。だからだろうあんなゲームに手を出したのは…。

現実とゲームの壁は混ざりあいやがて逆転していく。  
こんな俺にも何か出来ることはあるのだらうか。

## 解説1（前書き）

中学時代に書いてたやつを見てみるとひどいもんですね。  
ちょっと手を加えるだけのつもりがかなり変わってしまいました。  
面白くなるようこれからもバンバン書き直します！  
見てつて下さいね？

## 解説1

ブルー・アイリス ワード

如月 達哉（15才）男

171cm 48kg

過去の事故の影響で右目に魔術具を持つ。 グループの突っ込み担当。

氷の刀使いで能力を使っている時だけ右目が青くなる。  
毒舌だが人には好かれる。 使用魔術具

氷不死鳥の核

氷凰

新島 椿（16才）男

169cm 56kg

達哉の親友。 グループの突っ込み担当。  
エレベーター式のマジックスクールに小2の時に転入してきた。  
達哉と対をなすドSである。 紅蓮の瞳を持つ火の双剣使い。

使用魔術具

火龍の双牙

龍の腕紐

有馬 悠（16才）男

174cm 61kg

頭が良く、作戦立案者。 グループの盛り上げ担当で、人気者。 元ボクシング部所属の地の手甲使い。

使用魔術具

巨人の腕

泥作りの首飾り

坂神 文弥 (16才) 男

163cm 43kg

グループの盛り上げ担当。医者の息子のだが、その生まれを嫌つて  
いる。

風の鞭使い。

使用魔術具

天馬の尾

天馬の翼

平山 隼斗 (16才) 男

165cm 52kg

ビビりで、後衛専門のぼっちゃり。

グループのいじられ担当。オタクに向かってまっしぐらな、無使い。

使用魔術具

無の象徴

逃げの足輪

安藤 美紀 (16才) 女

167cm 42kg

男っぽい性格。

グループのまとめ担当で男子は逃げぎみだがわりと美人。

ぬいぐるみを集めるのが趣味という乙女チックな一面もある。

雷の護符使い。

使用魔術具

雷の紙束

信号首輪

早崎 鏡花 (15才) 女

161cm 40kg

達哉の右目の秘密を家族以外で唯一知っている人物。グループの癒し担当。

達哉の幼なじみでのほほんとしているためいつも達哉にいじられている。

水の杖使い。

使用魔術具

水柱の杖

結ぶ指輪

如月 瑞美 (14才) 女  
152cm 38kg

多少ブランコ入った、達哉の妹。

マジックスクールの中等部に在籍している。

来年高等部に入学してくる光使い。

使用魔術具

天使の翼

エンジェル・リング

解説

達哉たちの通う学校

大日本マジックスクール

生徒数5000人以上の小中高一貫校。

達哉たち7人は高等部の1年、瑞美は中等部の3年。

魔術具

モンスターが死んだ後、残された素材を使って作ったアイテムのこと。

武具として使うウェポン系と、一般家庭で使うためのローカル系が

ある。

属性

火、水、雷、風、地、木、光、闇、無があり、派生してさらに多くなる。

基本は一人一種類持つ。

この世界は科学と魔法、相入れないはずの二つが混合している。町の外にはたくさんのモンスター達が徘徊しているため常に危険地帯と化している。科学と魔法の力で守られている主人公達はある最先端オンラインゲームを見つけ興味本意で始めてしまつ…。

ゲームの世界は4つの界で出来ており、人が住む現界（火、木）、その下の下界（闇、地）、現界の上にある空界（風、雷）、一番上有る天界（光、水）がある。

属性、アバター、町や町の外のグラフィックはほぼ完全に現実世界と同じに出来ている。

## 解説1（後書き）

今回はワードだけです。

次回から本編です。

あからさまな敵役や、声だけの「ボーカー」の子も出ますが見てつけて下さいね？

## 現実・上（前書き）

2115年

科学と魔法が発達した世界。  
始まりは夏の統一祭。  
ここから物語が始まる。

## 保健室

部屋の外から響く喧騒と雄叫びで目が覚める。

俺こと如月達哉は保健室のベッドから身を起こすとぐつ、と伸びをした。特に体調が悪いわけではなくただのサボりだ。

「達哉～」

カーテンの向こうから聞いたとたんに眠くなるような間延びした声の主がトコトコと歩いてきた。

「鏡花か？」

「そうだよ～」

カーテンの隙間から少し幼い少女の顔がひょっこりと現れる。

このポワントした少女は、俺の幼なじみの早崎鏡花。どちらかと言うと遅崎だと思うのだがそれは胸の内にしまっている。

「もうすぐ決勝戦が始まるよ～。

早く起きないとみ～ちゃんたちにおいて行かれるよ～

み～ちゃんたち、とは拓哉や鏡花が普段一緒にいるグループの一人だ。

新島椿、有馬悠、坂神文弥、安藤美紀、平山隼斗の5人、全員で7人だ。小学生の頃から大体このメンバーで一緒にいることが多い、互いのことを下手をすれば親よりも理解している。

「達哉が来ないと私がみ～ちゃんに怒られるんだよ～

鏡花が情けない顔で腕を引つ張つてきた。

鏡花は昔から達哉以外の友人には「～ちゃん」を付ける癖がある。

「ハイハイ、わかつたよ～しぶしぶベッドから出て、歩き出す。

「あっ、待つてよ～」

鏡花がトコトコと一生懸命についてくる。なんと言えぱいいか鏡花は（外見以外は）高校生より小学生に近い。中身が成長していない

だけかも知れないが…。

結局、鏡花の速度にあわせて横を歩く。  
横田で鏡花を見るところを見ながら一々一々していた。

## 移動

「ようやく来たか。サボリ魔め」

「ずいぶんなごあいさつだな、美紀」

「ふんっ」

と、そっぽを向いてしまうみ～ちゃんこと安藤美紀。

「まあまあ。とりあえず不戦敗にならなかつただけいいじゃん。ね  
つ？」

明らかに機嫌伺いをしているのが分かるビビリ隼斗の言ひ回しに  
美紀はさらに怒りだす。

5人は安全地帯まで避難してから、決勝戦の作戦を立てる。  
もちろん、たびたび聞こえてくる悲鳴はスルー。

「今回は誰が前衛に行く？」

達哉が椿に話かけると

「…俺が行く」

と、殺氣のこもった声で悠が言った。

「…何があつた？」

向かいにいる椿に聞くと、

「それが…」

## 30分前

椿、悠、隼斗が会場に向かつて廊下を歩いていると、

「またお前らかよ」

少し長めの髪をかき上げながら歩いてくる影があった。

「…ん?」

三人一斉に同じ反応をする。

向かいに立っていたのは今回の相手、流生率いるグループだった。

「口うちのセリフだ」

椿が鬱陶しそうに答える。

流生のグループは毎回トーナメントに出て、毎回達哉たちに負けているグループだ。

「けつ、いつもいつも邪魔なんだよ……」

「んだとトカゲ顔！」

「なつ！言つてはならないことを……」

椿のトラウマ級の発言に流生が怯む。

「そ、それより。毎回トーナメントに出て毎回俺たちが負けるなんてな。どんなイカサマ使っているのか知りたいもんだ」

この流生の言葉に、

プチン

と、何かが切れる音がした。

「……殺す」

「くつ？」

悠はそう言ひ残して歩いていった。

回想終わり

「と、言つ事があつた」

椿が淡々と言つた。

「んじや悠に前衛やつてもらおつ」

悠の怒りに巻き込まれるのは「メンだと、文弥が聞こえない」と付け足す。

「友達想いだね」

鏡花がゆる〜く締めぐぐる。

「決まつたみたいだな」

すつきりした顔の美紀が近付いてきて言った。尊い犠牲のもとに危険は去つたのだろう。

「おう。じゃあ、行くか

達哉が歩き出し、みながそれに続いた。

「ねえ、は～ちゃんはどうするの？」

鏡花が美紀に聞くと

「紐でもくぐり着けて引っ張つてけばいいじゃない」

「あはは…」

もはや笑うしかなかつた。

## 決勝戦

広いドーム状の模擬戦ホールで達哉たち7人と流生率いる10人が向かい合つていた。緊張感がひしひしと伝わつてくる。

審判役の教師が台上に上り…

『レディー・ゴー!!』

大声と共に開始のブザーがなる。

「うおっしゃー、いくぞイカサマ野郎ども…」

「…やつぱ殺す」

こづして決勝戦は始まつた。

みんなあー、いきなりの展開に押し流されてしまいそうだからあー、ちょー簡単な説明をしておきますねえー

え？お前は誰かつて？それはまだまだ秘密ですっ！

コホンッ、私の事はベルちゃんと呼んで下さいねー　ベルたんでも、ベルたまでも、お好きな用に呼んで下さいー

え？お前なんか興味ないからバトル見せろって？とつとと失せろつ

て？やだなーブチコロシマスヨー

…うん静かになつたね

おっといけない説明説明つと

今皆が見たがつてるのは大日本マジックスクール伝統行事、『統一祭』って言うんですよ 春夏秋冬、年に4回のバトルリーグです マジックスクールって言うのはー、『魔法使い』を作る学校で、統一祭がその頂点を決めるトーナメントつて感じです 説明はこんなもんかな？それじゃ、バーイ

今日の達哉たちはいつもと違つていた。何が違つかと言われたら全体的に違つっていた。

いつもなら互いをフォロー出来るようとするのだが…。

「殺す殺すコロスコロスコロスコロス」

悠が恐かつた。

「な、なあ悠やばくないか？」

文弥がちょっと引き気味に訪ねる。

「う～ん、出来るだけフォローするしかないね～」「つたくあの馬鹿」

鏡花と美紀もあきれ氣味だ。

フォーメーションもいつもと違い前衛が悠一人、あと全員が後衛になつてている。6人の前では悠がバーサーカーのことく戦つている。

「た、助けてえ～！！」

「ヒィイ、来るなア～！！」…………。

6人は心の中で『御愁傷様』と手を合わせた。

『優勝は達哉グループです！』

## 文弥の部屋

場所が変わつて文弥の部屋。マジックスクールの生徒は全員寮生活している。

大抵みんなで集まる時は、文弥の部屋に行く。家具は少ないが決して寂しい感はなく、少ない分広いのだ。まあ、7人入れば手狭になつてしまふが。

「いやー、今回も楽勝だつたな」

「ストレスは発散できたか?」

「ああ、ばっちりだ」

「怪我なくて良かつたよね~」

「怪我したらお前が治してくれるんだろう?」

「あいつの火は弱すぎる」

「えー強いのやじやん」

文弥、美紀、悠、鏡花、達哉、椿、隼斗の順で言つ。一緒にいても必ず同じ話題で話す訳ではない。

「次のトーナメントもらくしょ……」

そこで文弥の声が途切れた。

ウーウーウーウーウー赤いランプと非常警報が鳴り響く。

「非常警報……！ モンスターか！？」

「くそつ。とりあえずロビーに行くぞ……」

美紀に促されて階部屋から走り出た。

## 寮のロビー

ロビーは混乱した生徒で一杯になつていた。それも当たり前だらう。

非常警報には3つの種類があり、

青色…街にモンスター出現黄色…学校周辺に出現

赤色…学校内に出現

と、なる。

赤いランプとはつまり、学校内、および寮内にモンスターが出現したことを見出す。

達哉たちはロビーにある大型モニターに目を向ける。

『警戒レベル、レッド。

侵入モンスターは2体

見つけた者はモンスターを討伐するよう指示された。

とだけ、記されていた。

「くつそ。投げやりだな教師ども！」

椿が毒づく。

「そんなこといいから早くいぐぞー！」

美紀が喝を入れて、皆走り出す。

**現実・上（後書き）**

ゲームは次からです。  
待つて下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8750y/>

---

ブルー・アイリス

2011年11月26日19時51分発行